



女性医師支援センター便り

大学医学部・医学会女性医師支援担当者連絡会に参加して



宮城県女性医師支援センター委員
東北大学病院小児科

福 與 なおみ

いつも宮城県女性医師支援センターへのご理解とご協力をありがとうございます。平成26年9月26日に日本医師会館で行われた大学医学部・医学会女性医師支援担当者連絡会に出席しました。全国の大学医学部や学会における男女共同参画の実態を知ることができるとても有意義な会でしたので、ご報告させていただきます。

事例発表では、大学として長崎大学、奈良県立医科大学、東京医科大学の3大学の取り組み、学会として日本小児科学会の取り組みが紹介されました。最後に、宮城県医師会の常任理事である高橋克子先生から、日本医師会主催の女性医師支援に関するアンケート調査結果の報告がありました。

長崎大学病院における「あじさいプロジェクト」で印象に残った取り組みは、大学病院内でマタニティー白衣の貸し出しや、イブニングシッター（医局会やカンファレンス参加のための院内共同シッター）、地域医療機関訪問などでした。また、長崎県医師会とタイアップして保育サポートシステムが構築されていることや、医学部3年生時に1日かけてワークライフバランスに関するグループワークを取り入れた講義もあることは、是非参考にさせていただきたいと思いました。

奈良県立医科大学では、研究の継続を支援することを重視した取り組みがなされていました。院内保育室の定員が60名（平成27年度には90名に拡充予定）！と聞き、とても手厚い体制だと感じました。さらに、夕方には授業を終えた看護学生や医学生がボランティアに入ることを知り、いいアイデアだと思いました。

NO PHOTO

東京医科大学では、近隣のホテル内保育室と提携して待機児童対策を行ったり、近隣医科大学とタイアップしてファミリーサポートシステムを構築したりと、学内で足りないところを外部で補い積極的に支援していく体制を強く感じました。医学生に対しても、1年・3年・5年生と継続したキャリア教育が施行されていることも、熱心に取り組んでいる現れだと実感しました。

学会としては、福輿が日本小児科学会男女共同参画推進委員会委員として、全国の大学医学部におけるワークライフバランスに関する講義やホームページ上での記載内容に関するアンケート結果を発表させていただきました。回答率は約6割のなかでの集計結果でしたが、女性医師支援を含めたワークライフバランスに関する講義を施行している大学は約半数であるという結果は、高橋克子先生が発表された日本医師会で行ったアンケート結果（回答率80%）とほぼ同じでした。大学で学生がワークライフバランスに関する講義を受け、男女共同参画の意義を考え、自覚し、今後に生かすことは非常に大切なことだと思われま

す。高橋克子先生は、アンケート結果から医療界（大学医学部、学会、医師会）における意思決定の場には女性医師が少ないかを指摘され、一方では大学病院内保育施設設置やその充実、短時間正規雇用制度や主治医制度の見直しなど少しずつ改革が進んでいると思われると結びました。

少ない時間の中で行われた最後の意見交換では、各大学代表の先生から活発に質問ができました。発表されたそれぞれの大学での取り組みを参考にしたいと思う熱意が伝わる質問が多かったです。私にとって印象的だったのは、宮城県女性医師支援センター委員で東北大学病院血液免疫病学分野准教授の藤原実名美先生からの質問に対する長崎大学の伊東昌子先生のご回答でした。藤原先生からの質問は、「発表されたような女性医師支援に関する取り組みを行うには、センター長として企画・実行などかなりの時間を要すると思うが、ご自身の生活の中でどのように時間を確保しているのか」という主旨でした。伊東先生は、「はっきり言って、自分自身のワークライフバランスはないです。」という回答でした。伊東先生は、大学病院で糖尿病などの内科疾患の診療・研究のかたわら、長崎大学男女共同参画推進センターと長崎大学病院メディカル・ワークライフバランスセンターのトップを兼任なさる生活をしており、自分が自由に使える時間はほぼない様子でした。それでも、後輩の医師が、キャリアを継続するために、自分らしく仕事をするために、ライフステージに応じた働き方を一緒に考えていくというスタンスを信念に、センター長を務められていることが、大変印象的でした。

男女共同参画が推進している学会・大学医学部と、そうでない学会・医学部の“差”の大きさを実感した会でした。地域性や病院の規模を考慮すると、男女共同参画のすすめかたは、画一ではうまくいきません。各地方、各大学の方法を参考にしながら、私たちは、宮城県にあった男女共同参画のすすめかたを考えていかななくてはいけないと強く思いました。その中で常に考慮すべきこととして、勤務医全体のワークライフバランスを考えることは非常に重要ですが、そのために、誰かのワークライフバランスを犠牲にするということがないようにしなければならないことがあげられると思いました。

